

せいか、頭が重い。パジャマ代わりのTシャツをバフバフ動かしながら、窓をあけると、もわんとした重たい空気に包まれる。

よけいに暑い。

二度寝をあきらめて、牛乳を大きめのマグカップにとぼとぼそそいで、のどに流し込んだ。

——おひげだ！

——おひげ、おひげ

おやつの時間に互いの顔を指さして笑いあう、きりん組の子どもたちを思い出した。牛乳ひとつで大騒ぎだ。しおん君も、鼻の下に白いあとをつけて笑ってた。

ぶんとかぶりを振って、口を拭った。

たまたま職場体験で保育園に行っただけだ。それもたった五日間。あと一日。だいたい子どもなんて好きでもなんでもない。うるさいし、すぐ泣くし、調子に乗ってふざけてめんどろなだけだ。……。

昨日の夜、マンシヨンの前にいたしおん君の背中がフラッシュする。小さなからだを棘だらけにして、だれも寄せ付けない。手を伸ばすことも声をかけることも、近づくこともすべてを拒んでいた。

あれは本当にしおん君だったんだろうか。「ふうたくん」と言いながら、ジャージをそっと握ってくる、あのしおん君だったんだろうか。まぶしそうにオレを見あげて笑う、

あのしおん君なんだろうか？

昨日の晩から、何度も何度も同じことを考えている。すつと息を吸いこむ。

知ってたって、気づいてたって、なにもしてやれない。

なにもできないなら、知らないほうがいい。

ローテーブルの上に置きっぱなしになっているリモコンを押すと、テレビの液晶画面には通販番組が映し出される。ピッ、ピッ、チャンネルを換える。もう一度ピッとしたところで手が止まった。司会をしているタレントが真面目な顔でうなずいている。その右端に出ているテロップにぞくりとした。

『虐待の疑いで母親逮捕 相次ぐ虐待死はなぜ防げない』

ちがう、そんなじゃない。しおん君はちがう。

どくどくどく、鼓動が早くなる。

「なんだよ、なんでだよ……」

風汰は家を飛び出し、団地の階段を駆け下りた。正面にある公園をつつきり、路地にでる。むんとした重たい風がアスファルトからたちのぼってくる。うしろから大きなクラクションが鳴り、引越し屋のトラックが風汰のすぐ横をすり抜けていった。

思わず足をとめると、驚くほど息が上がっていた。膝に手をあて、肩を揺らす。地面にぼたぼたと汗が落ち、黒いシミをつける。ぐっと顔を上げると、正面に灰色のマンシ